

棚沢直子・中嶋公子編

# フランスから見る 日本ジェンダー史

権力と女性表象の日仏比較

日本は明治以後、西欧言語の多くを習得し、重要な書物を翻訳・紹介してきた。しかし西欧人の中でも特にフランス人たちは、現代でも西欧以外の言語を習得することはまれである。彼らは「自国の歴史や文化を学んだだけで思想形成する。」したがって現代フランスの女性思想家たち「イリガライ、クリステヴァ、コフマン、デルファイ、シクスーら」さえ、西欧思想全体の徹底的な批判をしながらも、「西欧『普遍性』」の枠内に無自覚的に収まったままにしていると、この本の編者は述べている。普遍性は複数あり対話することが重要だと、一九九九年と翌年に東京とパリで行われた日仏女性研究シンポジウムに基づいて作られたのが、本書である。

残念なことに、上述のフランスの女性思想家たちは

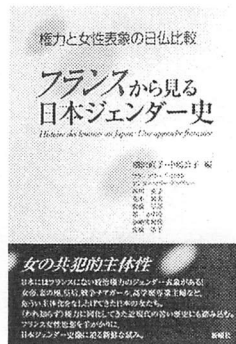
主にアメリカ経由で日本語の多くを習得し、重要な書物を翻訳・紹介してきた。しかし西欧人の中でも特にフランス人たちは、現代でも西欧以外の言語を習得することはまれである。彼らは「自国の歴史や文化を学んだだけで思想形成する。」したがって現代フランスの女性思想家たち「イリガライ、クリステヴァ、コフマン、デルファイ、シクスーら」さえ、西欧思想全体の徹底的な批判をしながらも、「西欧『普遍性』」の枠内に無自覚的に収まったままにしていると、この本の編者は述べている。普遍性は複数あり対話することが重要だと、一九九九年と翌年に東京とパリで行われた日

フランスでは自分はフェミニストではないと明言している」と私に語ったことが思い出される。日本人が西欧の思想を翻訳・紹介して日本に導入するときには、こ

ようなすがいくつも生じて成立しているから、女がそこから脱出するには、以来、西欧を模倣したつもりでも、日本人は「物質文明の担い手は女」などとして、西

性で自然、精神と物質、理性と感性などを対立させて、前者が「男」、後者が「女」として成立しているから、女がそこから脱出するには、

本書の第Ⅱ部「日本ジェンダー史の再検討、権力と女性表象」で明らかにされているように、ある一定の範囲内であったにせよ、特に古代では女が力を持ち力を行使してきた歴史がある。また現代日本の短大・四大



46判・332頁・3360円  
新曜社  
978-4-7885-1041-8

## 日仏の違いを明らかに

普遍性は複数あり対話することが重要

松本 伊 磋 子

・大学院卒の「高学歴専業主婦」たちはフランスには存在しない。西欧のジェンダー理論では、日本のジェンダーの在り方は理解できない部分が多いのである。第Ⅱ部はフランスとは違う日本女性の歴史の在り方を明確に打ち出している好論文ぞろいであり、日本社会の歴史を知らずして、輸入のジェンダー理論だけでは日本女性の今後の展望も見えてこないことがよく分

して成立しているから、女がそこから脱出するには、以来、西欧を模倣したつもりでも、日本人は「物質文明の担い手は女」などとして、西

性で自然、精神と物質、理性と感性などを対立させて、前者が「男」、後者が「女」として成立しているから、女がそこから脱出するには、

本書の第Ⅱ部「日本ジェンダー史の再検討、権力と女性表象」で明らかにされているように、ある一定の範囲内であったにせよ、特に古代では女が力を持ち力を行使してきた歴史がある。また現代日本の短大・四大

からこそ、通俗的な「フランスから見た日本」でも、「日本を学ぶフランス人研究者から見る日本」でもない、「フランスを学ぶ日本人研究者から見る日本」といさこ氏に名古屋大学教授・フェミニズム批評・女性学専攻）

「フランスに向け書き直し出版したい」そうである。一日も早くその日が実現することを願うばかりだ。ジェンダー研究の分野において、文化の輸入から輸出へと転じる日が、そう遠くはないという嬉しい事実を告げる好書である。(まつも人研究者から見る日本)のと・いさこ氏に名古屋大学教授・フェミニズム批評・女性学専攻）

